監督として連盟と学生諸君へ

思い出のままに

愛媛大学剣道部監督
青木恒男

四〇周年記念誌ということである。思えば長い付き合いであった。昭和四〇年代は審判員の若手として、中原、三好、酒井の諸先生の御伴をして、松山から広島に通ったものである。ある時、帰りの最終便の水中翼船が後三人しか乗れぬと言うことで、〝残ります〟と申し出て、一人残った思い出も、今や懐かしい限りで宇品港に行く度に思い出す。お蔭様で、フェリーボートに乗って遅れる事四時間余りで松山に帰った。当時の大先輩は、すでに中原、大森、大田の諸先生を始め何人かが亡くなられ、その他は今は勇退しておられるわけである。かつて現役で試合に活躍した諸君が今や審判員、あるいは監督として学生の指導に当たっている。当時の若武者も今や四〇、五〇の親父面になっていて、〝ギョッ〟とさせられる事もあろうと言うものである。相談役の植田先生は別格としても、今や会長副会長を含めて長老的な存在になったのが何か淋しい処である。大体、竹刀は別としても、筆を含めてものを持つのが苦手な小生としては、思い出やら昨今の所感等述べてお茶をにごす事にする。

㈠昭和四〇年頃の応援合戦は凄かった。〝ワーッワーッ〟であり、〝それ打て〟〝退るな〟等のまるで角力か野球の応援のようであった。審判の途中で試合を中断して応援を止めさせたものである。随分嫌な審判だと思われていたに違いない。今は全剣連の指導もあって、ほとんど拍手のみで派手な応援はないようで、よい事である。一時〝タイム〟の数分前を選手に知らせるための控えの選手その他の拍手があったようだが今はなくなっている。当たり前の事である。応援などいっさいするべきではない。

㈡何時であったか〝グランドルール〟で防具の紐が自然にとけた者は反則にすると決めたら、試合の途中で紐がとけた者はほとんどなかったように思う。今はとけて締め直す者のために試合の中断が多い。五分や延長を含めてもたかが十分位の試合の途中で自然に紐がとけるなどという事は不用意も甚だしい。戦場で鎧の紐がとけたからといって待ってくれる相手などないわけだ。解けたまま試合をさせても良いわけだが、危険予防上締め直さざるを得ないようである。これは、反則をとってもおかしくないと思っている。

㈢面紐の長さはなかなか徹底しないようだ。誓約書等提出させているようであるので、誓ったり、決められた事のできない者は試合をさせなければ良い。ゼッケンに団体名や個人名がない者は試合をさせないという全剣連の指導に準じたら良いわけである。

㈣団体礼の後の拍手は一体何のためだろうか。昔、高校生が団体の礼の後で円陣を組んで気勢をあげた事があったが、取り止めさせられたと聞く。その代わりのものが拍手であろう。兎も角も色々の事をやるものである。恐らくその真似であろう。自分を元気づけるためか、相手を称えるためか。何れにしても拍手を送るのは第三者であり当事者には必要ないと思っている。やりたければ逆立ちでもやれと学生

には言ってある。何もしない礼のみが良いと思う。

㈤前進しての胴打はほとんど片手である。右手の使えぬ無理な所から打つので片手にならざるを得ない。その証拠に距離のとれる引胴に片手打を見た事はない。上段からの片手打もあるわけであるので絶対に不可とは言わぬが、不思議な事に上段の者の胴打は両手で打っている。少なくとも打った瞬間は左手が離れぬ事が望ましいと思っている。

㈥他のスポーツの影響か流行であろう、試合の前に選手が宣誓をする。他のスポーツはいざ知らず、剣道は元々正々堂々たるものだ。改めて宣誓などする必要はないと思う。

愛大の学生には、試合規則では認められているが倒れた者を打ってまで勝つな、自分が倒れたら漫然と〝止め〟がかかるのを待ったり、手で防いだりする事なく、例え反則にとられても組み付いて行け、等言ってある。脱線監督のせいか愛大の成績は良くない。試合に勝つのに越した事はないが、所詮板の間の上で、竹刀での試合である。「勝っても負けてもたいした事はない。しかし人生の試合には負けてはならぬ。そのための剣道であるぞ」と話している。中四の剣道部の学生諸君がこの道を通じて逞しく育って行ってくれる事を心から希う。

交剣と貢献

宇部短期大学剣道部監督
喜志多正範

はじめに

宇部短期大学を諸先輩方の御厚情により本連盟に加入させていただいたのが、今から七年前。部員も少なく、出場可能な大会は地区剣道連盟の主催する年二～三回の大会だけという状況でした。その同好会にも似た本大学剣道部の加盟を快諾していただき、また、ご指導を請うことを許してくださった本連盟の諸先輩方や、学生諸君に深く感謝いたしております。

私は高校の教員という立場であるために、当時、同じ学園である短大剣道部の学生には高校生の元立ち程度を依頼するといったものでした。しかし、短期大学という繁忙な毎日の中、高校生に対し必死に稽古をつけてくれる学生たちを見て本連盟に加盟することができればと思うようになりました。しかし、昨今の剣道離れによる剣道人口の減少に伴って、短大である本剣道部の維持や私の指導力等不安の材料は山ほどありました。それに対するご助言も含め、多くの先輩方にご迷惑をおかけしたことを今をもってお礼申し上げる次第であります。

さて、四〇周年を迎えた中四国学生剣道連盟に対し、心よりお慶び申し上げます。

学生諸君に対し私の所感を述べさせていただきます。まず学生剣道とは、最高学府、すなわち社会人となる直前の教育機関でおこなわれる剣道のことと考えます。前述いたしましたように、私は本大学剣道部が創部されるまで高校生の指導のみ情熱を傾けており、目標として高校だけで終わる剣道ではなく、大学でも通用する剣道が身につくようにと指導してまいりました。そして、本大学剣道部を受け持つ機会が訪れたとき、大学で通用する剣道の指導が高校なら、大学では社会に通用する剣道をという目標ができあがったのです。

それでは、社会に通用する剣道とはどのようなものなのか。それについて私は、剣道で培った頑強な心身をもって社会への貢献を意義とするものではなかろうかと考えます。加えてそれは実践的な剣道のみならず社会という道場において活用できるものであり、自己とその社会の円滑剤的な効果も十分得られるものであると思います。すなわち、学生剣道においては、試合に勝つことなど技術的なものだけでなく、剣道を通し、人と人とのつながりや社会人予備軍としての予習をすることのできる一つの機会であるということができましょう。

剣を交える、すなわち「交剣」。「交剣」と「貢献」。同じ読みで相通じるものがあるこの言葉。いろいろな剣道用語がある中で、これから社会人剣道へと飛び立つための滑走路を持つ学生剣道にとって意義深いつながりのある言葉であると思います。その二つの言葉の持つ意味をこれからも十分汲み取っていただき、精進していただければと思います。

学生剣士諸君のこれからの輝かしい未来を期待しています。

終わりになりましたが、これからの中四国学生剣道連盟の益々のご発展と、それを支える先輩方や学生諸君のさらなる繁栄を祈念しております。

真摯敢闘を！

岡山大学剣道部監督
杉本八郎

中四国学生剣道連盟創立四〇周年の記念すべき年は、岡山大学剣道部にとりましても、創部四〇周年に当たります。この四〇年の中で私が岡山大学の師範として、指導・監督に就任してから、今年で丁度二〇年になります。したがって、中四国学生剣道連盟と深い関係を持つようになったのも、このころからになります。

岡山大学剣道部発足から四〇年の歴史を簡単に、その大会成績の記録面から回顧してみると、中四国学生剣道大会で男子優勝八回、二位・三位の入賞が約一〇回程でありますが、その優勝八回の中、六回が初期の一〇年間に集中しており、岡大剣道部の黄金期であったといえます。その後、一〇年余りは、優勝はもちろん上位入賞もほとんどない低迷期が続き、昭和五〇年頃から、少しずつ上向きになり、その後今日までに優勝二回、二位・三位は六回という成績を残しています。

次に女子団体の部では、優勝・二位・三位の入賞数回ありますが、昭和六二年、中四国大会で優勝した岡大女子チームが、全国大会に出場、見事ベストエイトに進出、健闘したことは、体育系でない国立大学で、しかも選手は一般学部の学生であっただけに、特筆すべき快挙でありました。

右のように、国立大学としては一応、並以上と思われる成績を残してきた岡山大学も、数年前から大変厳しい危機的な現状にあることを憂えています。このことは、岡山大学のみならず、中四連盟の他の大学も大なり小なり同じように、かかえている問題ではないかと思います。

それは、新入部員の減少であります。その原因の一つに大学新入生の意識の変化があげられます。以前は大学新入生で剣道有段者を始め、過去においての剣道経験者が多数、剣道部に入部してきたものですが、最近の新入生の多くは、心身を鍛錬するというような部は敬遠し、レクリエーション的なクラブや同好会に入って大学生活を楽しみたいという願望の者が多く、誠になさけない現象になっています。また剣道部員の練習量にしても、以前は、部の稽古終了後、暇のある者は県立武道館に行き、夜の一般稽古に参加して修業する学生もいましたが、最近の学生はこのように出稽古までする者はほとんどいません。それどころか、学校での練習にしても、勉強が忙しいからとか、用事があるとかで、簡単に練習を休む状態で、これでは、文武不岐の精神は全くうたい文句だけに終わります。

次に中四国学生連盟のより一層の発展を期するためには、レベルの向上を図ることが必須条件になります。これは、高校でインターハイや国体で活躍した選手はもちろん、その他、県でのトップクラスの選手の大部分が関東や関西の大学に進学流出して、地元の中四国に残らないことです。それは中四国の大学の剣道部の実力が低く、今一歩なので、全日本での活躍の場が少ないと判断していることが要因ではなかろうかと思います。

この対策はいうまでもなく、中四国連盟のレベルの向上にあります。厳しく、苦しいことですが、当面の現有勢力で最大の努力をして、全日本大会で、中四国連盟の代表が常時入賞を果たし、大いに活躍している実績を見せたとき、高校生が中四国連盟の大学に魅力を感じ、目をむけてくることになります。これが、とりもなおさず、中四国学生剣道連盟の発展にもつながることになります。

剣道は「生涯是修業」といいます。レベルの向上は毎日の修練の積み重ねより道はありません。真摯敢闘を祈念いたします。

自分自身を鍛える

海上保安大学校剣道部監督
島田伸和

このたびは、中四国学生剣道連盟四〇周年まことにおめでとうございます。連盟が四〇年の長きにわたり発展されましたことは、ひとえに我国の古き良

き武道であります剣道を、こよなく愛し育ててこられました連盟役員の皆様はじめ、真摯な態度で剣道に取り組む学生諸君のご努力の賜と存じます。

さて、私ども海上保安大学校は全校学生数が二〇〇人足らずで少ないにもかかわらず、最近の風潮で野球あり、サッカーありとクラブ数が多く、これが災いしてか、剣道部員は毎年十数名と世帯の小さなクラブとなっています。

さらに、当校は練習船を使った乗船実習が各学年毎に一年間を通じて配置されており、長いもので二か月間、短いものでも二週間、学生は洋上の人となってしまいます。

このような状態ですので、連盟主催の春と秋の大会参加も思うに任せず、毎回参加部員を集めるのに大変苦労しているのが実状です。そのため、大会運営に十分なお役にも立てず御迷惑ばかりおかけしているものと心苦しく思うと同時に、心からお詫び申し上げます。

しかしながら、当校剣道部員の意識は高く、剣道にかける情熱は他大学の学生に引けをとらぬと確信しております。大会参加に臨んでは部員一人一人が日ごろの鍛錬を存分に発揮し、自分に恥じないような試合をやろうという気構えを常々持っております。しかし、如何せん十分に実力が発揮できるはずの個人戦におきましてもいまだ好成績が得られず、団体戦におきましても一回戦敗退という憂き目をもって試合から帰ってくるにつけ、残念でたまりません。

かのクーベルタン男爵の言葉に「スポーツは参加することに意義が有る」とは申しますが、やはり日ごろの鍛錬の成果をもって技と力と頭脳によって相手を打ち負かすことは、剣道に限らずどのスポーツにおきましても究極の目的であろうと思います。その意味からも当校学生はもっともっと自分自身を鍛えてもらいたいと思っています。

剣道を愛する学生諸君におかれましては、ただただ練習に打ち込み、礼儀を忘れず、剣道の神髄に少しでも近付けるよう努力されんことを祈っております。また、お互いに良きライバルとして大会で竹刀を交え切磋琢磨されんことを大いに期待しています。そしてこのように学生諸君が一堂に会して日ごろの実力を発揮しあえる大会を毎回運営していただいている連盟の皆様の御助力に対しまして、改めてお礼申し上げます。

最後になりましたが、中四国学生剣道連盟がこれからも益々発展され、学生剣道の良き理解者・指導者としていつまでも御活躍されますよう心からお祈りいたしております。

監督の役割

香川大学剣道部監督
山神眞一

私は、縁あって母校香川大学に勤めることになり、同時に剣道部監督として関わるようになって早や一二年が過ぎました。近年、何よりもうれしいと思うことは、卒業後なんらかの形で剣道を続けてくれたり、剣道を大切に思ってくれる卒業生が多くいることです。

卒業生の一人、A氏は、折に触れて電話や手紙で剣道部のことを気づかっていただき、道場にも顔を出してくれます。有り難いことです。

また、Kさんは、中学校で部活の面倒を熱心にみており、教え子を母校に進学させようと働きかけてくれています。卒業生の母校への想いの形は様々ですが、ただただ感謝の念でいっぱいです。

これは、他の中四国連盟の大学においても同じではないかと思います。学生時代、思いきり剣道に打ち込んだ人、苦しんだ人など、こだわりや思い入れが大きかった人ほど、剣道愛、母校愛、連盟愛が強いように思われます。

このように考えると、監督という立場は、剣道愛、母校愛、連盟愛が持てるような体制づくりのお手伝いをしていくことではないかと思います。中四国連盟の各大学には、それぞれの事情があります。そして、監督の関わり方も様々だと思います。ただ、私個人としては、先にも述べたように剣道愛、母校愛、連盟愛を持ってくれるような思い出深く、感動に満ちた大学時代を送ってもらいたいと願っていますし、そのお手伝いができればと考えています。学生諸君には、〝思いきって打ち込む〟ことのすばらしさを体感してもらいたいと念願しています。

そして、私なりの剣道愛、母校愛、連盟愛を考えたとき、次のことが思い浮かびました。それは、近い将来、中四国連盟における各大学の監督相互の情報交換会や学生を含めた交流会が持てれば……ということです。実現に向けて一歩一歩努力していきたいと思います。

学生諸君に期待すること

吉備国際大学剣道部
順正短期大学剣道部監督
岡本直也

最近中四国地区の大学も力を付けてきてはいますが、九州地区で学生時代を過ごした私から見ると、他の地区と比べてまだまだ力不足という感は否めません。中四国地区の大学が中央の試合でさらに良い成績を残すには、地区の大学のすべての剣道部が一丸となって、全体のレベルアップを進めていかなくてはなりません。そのために今学生諸君がなすべきこととして、

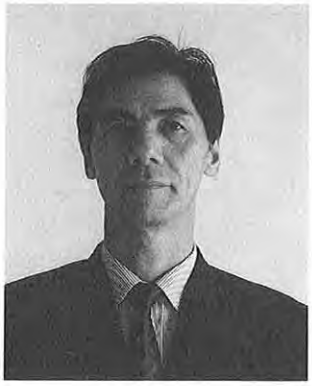
①伝統的稽古法を大切にしながらも常に新しいものを取り入れた科学的・効果的な稽古法を創造し、日々目的を持って精進に励む。

②定期的に練習試合を行なうなど、積極的に大学間の交流をもち、日々の稽古の成果を確認すると共にお互いに力を付けていく。

この二つがあげられます。四年間という短い学生時代の中で最大限の成果が上げられるよう、一日一日を大切にして稽古に励んでください。

学剣士に問う

高知大学剣道部監督
大塚忠義



大会会場で審判などを通じて、私はみんなの姿を見ている、そして剣道の未来を期待しています。そんなみんなに自分を投げ掛けたいと思います。

【私のこと】

大学二年生の頃だったと思います。私は何のために剣道をするのだろう、こんなに苦しい練習は何のためにするのかと悩みました。この問題は剣道の名門高校に入学した時以来、持ち続けてきた問題でしたが、「忍耐が、人間をつくる」と聞かされ、自らも美意識風に問題を飲み込んできたのだと思います。

高校とは違って大学時代は、多分、大学紛争の影響もあってのことでしょう、剣道を行なうことと社会に生きることのつながりをどうしても欲しくなったのだと思います。こうして師匠に会うことにより、この問題の糸口を見出し二〇余年、今や師匠とは異なった何のためにという問いを抱え続けている自分を発見します。その稽古が、その剣道が、自分のためになることは疑いのないことでしょう。しかし、そのことそのものが人々のためになるのか、一体、社会の何に寄与するものなのか……。私は、いつもとはいえませんが、剣道をそのように考えてきました。破邪顕正の剣、活人剣などの思想やかつての剣士達との社会関係、そして現代では剣道と民主主義の進歩などのようにです。

【問い掛け】

「芸は身を助くる」という言葉は、今ではたまたま泳ぎが上手であったので溺れずにすんだとか、習字が巧みだったので就職活動の時に有利に働いたとかの意味に使われるとのことです。しかし、本義は、「本人の最も大切なものの維持をすることであり、例えば泳ぎや習字ができてもその人の生命や生活がのうのうたるものにすぎないものであれば、それは芸が身を助けたとは言えず、逆に身をほろぼしたと言うべきである。問題は『身』、つまり、自分の本質、本性、信念を生かす上で芸が私を助けるのである」（注1）といわれています。果たして自分の剣道は末義なのか、本義なのか、あるいは身を助けているのか、身をほろぼしているのでしょうか。

もう一つ、「スポーツの技術は人間の自由性を拡大する、スポーツマンは自由な人間のあるべき姿を非日常的行為の内に先取りし、現実の空間の不自由を逆照射する」（注2）、自らの剣道が自由性を拡大し、その日常社会生活の不自由さや貧困を逆照射し、改善への感受性を培っているのかどうか、この言葉をお題目にするのではなく、生きる実質思想としてエネルギーにするにはどういう剣道でなければならないのか、などを考えているこの頃です。

注1　山崎怜「本義と末義」日本学術会議中国四国地区ニュース二五号
注2　伊藤高弘「地域スポーツ計画と主体形成」『スポーツ政策』大修館

剣道から何を学びますか？

四国学院大学剣道部監督
漆原光徳

「大学生にとって剣道とは何なのか？」また「剣道部とは何なのか？」あるいは「部員に何を学ばせればよいのか？」これらの事が監督を引き受けて以来、常に私の課題として存在していました。

四国学院大学の剣道部は、正直申し上げて、決して強くはありません。この大学の剣道部、いや剣道部に限らずほとんどの運動部がそうなのですが、それらは同好会的あるいはサークル的で、体育を専門にやってきた私にとっては、まさにカルチャーショックとでも呼ぶべきものでした。「彼らは本当に強くなりたいのだろうか？」と思うことが、これまで何度あったかわかりません。

このような状況の中で、まず最初に始めたことは〝組織〟をつくることでした。人間関係を重視した部としての組織作り。『勝つ』ということを第一目標にしていない本学剣道部にとって、それは必要不可欠なことであると考えました。しっかりと組織の枠組みを作った上で、それぞれが剣道との交わりを経験していく、そしてさらに、ここでの剣道が人生最後の稽古の場になるのではなく、今後の剣の道のあらたな始まり、あるいはあらたなきっかけとなる場であって欲しいと考えるようになりました。

剣道部では、OB会と現役の学生の情報交換の場として、定期的に新聞を発行しています。私も毎回文章を寄せるのですが、これまでに二度程、古来の禅問答の話をもとに書いたことがあります。これは『君は剣道から何を学ぶのか？』ということをそれぞれに考えてもらいたくて書いたものなのですが、最後にこれを中四国学生連盟の学生諸君へのメッセージとして書かせていただきたいと思います。

名剣士になることを目指した柳生又十朗は、高名な剣士、板三の所へ行って、稽古をつけてくれるよう頼んだのであった。

「一生懸命やれば、何年で剣の道の師範になれるでしょうか？」

又十朗が尋ねると、板三答えて曰く、「一生かかる」

「とてもそんなに待てません。教えていただけるならば、どんな苦行もいといません。先生の忠実な下僕となったら、何年で済むでしょうか？」

又十朗が聞き返すと、板三は不憫に思ったのか

「まあ、一〇年ぐらい」と答えた。

又十朗はそこで更に続けて、

「では、もっとがんばれば何年になるでしょうか？」と尋ねた。すると板三、今度は

「まあ、三〇年ぐらいだろう」と答えたのである。

又十朗は怒って問いかけた。

「それはどういうわけですか！　はじめは一〇年とおっしゃって、今度は三〇年だと。剣の道をできる限り早く極めるためであれば、どんな苦行も堪え忍びます」すると板三答えて曰く、

「そうか。そういうことであれば、おまえはわしの所に七〇年間とどまらねばだめだ。おまえのように功を急ぐ者が、速やかに上達したためしはほとんどない」

熱き心を持て

島根大学剣道部監督
境　英俊

昭和五九年四月に福田明正先生（島根大学名誉教授）の後任として島根大学に赴任して以来、丸一〇年が過ぎ一一年目を迎えています。この間、監督として、あるいは一人の剣道修行者として学生と共に稽古に取り組んでまいりました。

大学は最高学府として、将来の日本を背負って立つ人材を育成する場であり、そこに入学した学生はそれなりの自覚を持って勉学に励むことが使命であると考えます。

また、大学の剣道部というのは、いうまでもなく剣道を愛する者達の集団であり、それぞれの目標に向かって日々稽古に励んでいくものであります。学生と身近に接している立場で現在の大学生を見ると、授業も稽古も怠けることなくまじめに取り組んでは

いますが、さらに一歩踏み込んでやってみようという気概が感じられないのは私だけでしょうか？

最近の若者はいわゆる「指示待ち」の傾向が強いといわれています。勉学にしろ剣道にしろ義務的にやるのであれば、ある程度まではできると思います。しかしそういうやり方で一体何が残るのか、自分にとってプラスになるものがあったのかということを考えるとどうでしょうか。もちろん何か得るものはあるとは思いますが……。何でも吸収できる若い時期に何か一つのことに熱中すること、「……三昧」の生活を送ることも大切なことではないでしょうか。

先日、我が島根大学剣道部に韓国からの留学生「柳俊榮」さんがやってきました。彼は法文学部の留学生で、日本語・日本文学を学ぶことが目的です。そういう関係からぜひ日本の伝統文化としての剣道を学びたいという気持ちが強く、また韓国では剣道が盛んに行なわれており以前から興味を持っていたということからの入部でした。まったくの初心者でしたので、当初は足捌きや素振りもままならずかなり苦労をしていましたが、最近ではようやく無駄な力が抜け始め、剣道らしい動きに近づきつつあります。会う度に彼は「先生、剣道は難しい難しい」と言っていますが、彼の剣道に対する姿勢をみると我々が見習うべき点が数多くあります。

空き時間があると私の研究室にやってきて、私や学生と剣道に限らず韓国や日本の話をしたり、剣道のビデオをみたり、また色々な質問をしてきます。その姿からたった一年間の留学期間にできるだけ多くのことを吸収しようと言う気持ちがひしひしと伝わってきます。稽古においては我々が交替で指導していますが、自分が納得できるまで黙々と繰り返し練習をしています。

彼が稽古に参加するようになり、よりわかりやすい指導ということを改めて考えるようになりましたし、剣道を自分の生活の中でどう位置づけていくのか、どういう取り組み方をしていくべきかなどということを再確認する必要性を痛感しました。

来年の一〇月までという限られた期間の中でひたむきに精一杯剣道をしようという彼の姿に、我々も一生懸命答えるべく「熱き心」を持って精進したいものです。

期待するもの

下関市立大学剣道部監督
西森孝司

中四国学生剣道連盟四〇周年記念誌の編集の方から、〝監督として連盟と学生諸君へ〟というテーマを与えられました。〝期待するもの〟と題して、自分の学生剣道の体験を通して得たものをＯＢ監督の立場で述べてみたいと思います。連盟に所属する各大学剣道部の部員一人一人に少しでも参考になれば幸甚に思います。

下関市立大学は平成八年に開学四〇周年を迎えます。夜間の下関商業短期大学を母体として昭和四〇年四月に四年生大学に移管され今日に至っておりますが、一期生が市大剣道部を創部いたしました。

中四国学生剣道連盟が発足して六年目に連盟に加入し、連盟の成長発展の中で市大剣道部も歴史を刻んでまいりました。（平成八年には創部三五周年を迎えます。）

私は昭和四四年に市大に入学し、剣道部に入部いたしました。中学時代に少し剣道をかじりましたが、本格的に竹刀を握ったのははじめてでした。毎年昇段し（現在では不可能）四年の時に四段に合格いたしました。入部以来の地道な努力の積み重ねの成果として、中四国大会個人戦で入賞し、日本武道館で開催された全国大会に出場することができました。

往時を偲びますと、初戦の相手が光栄にも国士館大学の藤原選手でした。全力を尽くしましたが一本負けで惜敗（？）でした。藤原選手はその後、破竹の勢いで決勝に進出。しかしその行手に大きくたちはだかったのが関西学院大学の神谷選手でした。結局中四国連盟の代表の一人であった神谷選手が優勝の栄冠を手にしました。市大剣道部創部以来四年目にして初めて全国大会に出場できたことは、自分自身にとってもまた剣道部にとっても貴重な実績となりました。先輩の中には高校時代にインターハイに出場した実力者や自分より強い先輩は何人もいましたが、皮肉にも大学にはいって剣道を始めた私が全国大会に出場するとは誰が予想したでしょうか。

灰色の高校生活から自己変革を求めて、剣道に熱中できた四年間の大学生活は、〝やればできる〟という大変価値のある〝成功体験〟となりました。卒業後地元の金融機関に就職し支店長を目指した時、二〇年六か月勤務した金融機関を卒業（？）し、転職する時、また現職で社長の補佐役として経営課題に挑戦する時、全国大会に出場できた〝私の成功体

験〟は大きな心の支えとなりました。

私は大学時代に剣道を通して自分の生き方を学びました。私の監督としての仕事は、技術の指導もさることながら、部員一人一人に自分流の生き方を学ばせる事だと思って微力を尽くしております。

最後にアメリカのポール・J・マイヤー氏の言葉を紹介して筆を置きます。

「成功とは、自分にとって価値ある目標を段階をおって実現することである」

これからの中四国連盟と剣道部

就実女子大学剣道部
宇高善太郎

平素より中四国学生連盟の御指導のもとに、各大学剣道部が活躍できます事にたいへん有難く感謝いたしております。

就実女子大学剣道部も、先輩のお力添えでやっと剣道部ができました。稽古は週三回、一時間半の練習をしていますが、女子校であまり外部との交流もなく、女子学生のみですが活発に練習しています。連盟主催の春秋の試合に参加させていただき、他校の剣士と剣を交える事を楽しみにしています。部員も少人数ですが仲良く助け合って部活をしています。剣道形の指導をする時は皆熱心に練習しています。お蔭で審査会に参加しても皆合格をしています。

形は平素から練習をする事が良いと分かっていましても、なかなかできにくいようです。もっと練習回数を増やして練習したいと思っています。女子校のためかあまりスポーツには力を入れていないように思いますが、部員はそんな事にとらわれずただ練習に取り組んでいます。その内、剣道にも理解を持っていただける時が来ると信じています。そのためにはやはり試合に好成績を残すのが一番かもしれません。試合があるから平素の練習をがんばるのではなく、部の活動を活力のあるものにして、毎日の練習を休むことなくみんなで力を合わせてがんばる事の大事さを勉強してもらいたいと思います。試合に出て相手に勝った慶びを稽古につなぎ、練習に力が入り、だんだんと上達するのかもしれませんが、幸い部員も誰もやめる学生もなく卒業まで続けてやっています。一人一人が自覚して楽しくやっています。それで良いと思っています。

剣道によって自己の体力増強、精神力の育成やお友達との交流、思いやりの心を自然に身に付け、稽古の中で辛抱や我慢する事の勉強をして、礼儀正しい、約束の守れる学生になってもらいたいと思っています。このような気持ちで剣道を修業し学校を終えて、社会人になってからの効果が必ず現れるものと信じて、指導しています。監督としてでなく、剣道愛好家の一人として、老体ですが学生と共にがんばっています。

剣道部の学生諸君は皆、先生方の指導のよろしきを得て礼儀正しく好感の持てる学生ばかりで、誠に結構と存じています。剣道もどんどん会社や企業に進出してもっと国民の中に入り、幼少年の底辺育成に力を入れ剣道人口の増加を願っています。皆さんの手近なところから剣道指導に当たってくださる事を熱望し、生涯剣道として発展していくようになる事を望んでおります。

学生の最後の修業の場である大学時代の思い出に残るように、連盟の皆様の御活躍と御配慮を賜りたく今後よろしく御指導の程、お願い申し上げます。

居合いのすすめ

水産大学校剣道部監督
本村紘治郎

この度、中四国学生剣道連盟が四〇周年を迎えられましたことに、心からお慶び申し上げます。

「剣道は剣の理法の修練による人間形成の道」という理念や、「礼に始まり、礼に終わる」の喩えのとおり、剣道が技術の錬磨だけでなく、精神修養も目的としたわが国古来の文化であることは、剣道に励む学生諸君はもとより、剣道の経験のない人にも充分理解されているところです。

そのような剣道文化の継承と心身の鍛錬を目的として、常日頃から研鑽を重ね、切磋琢磨して剣道に精励する学生諸君の姿には、賞賛の言葉を惜しみなく贈りたいと思います。

しかし一方では、最近の剣道は古流の剣術に比べ

て、スポーツ的色彩が強いともいわれています。それは、当然のことながら、竹刀と防具に慣れ、打突のスピードが重視されているからでしょう。

私はかつて、古流の居合道を学んだことがありますが、居合道の参考書には、必ずといってよいほど「剣道と居合道は、極めて密接な関係にあり……」という内容の一文が見られます。居合道の一挙一動は正しく理にかなっており、居合道により修得した刀法、手の内は、剣道の技術を大きく向上させると思います。とはいうものの、勉学と剣道を両立しなければならない学生諸君には、時間的な余裕が十分でないという現実的な問題もあるでしょう。が、幸いにも中四国地方では古流の居合道が盛んですし、また、古流の流儀にとらわれない全日本剣道連盟の制定居合もありますから、居合道もあわせて修得し、真剣味をさらに会得するのも、向上のための一つの方法と考えるのです。

わが国の将来は、間もなく若い世代に引き継がれ、諸君の肩に掛かってくることとなりましょう。学生諸君が剣道で培った「気剣体」の動作や「心気力一致」の精神は、今後の社会生活に大いに役立つとともに、わが国の繁栄のために発揮する情熱の源になると思います。

そのようなことを考えますと、心身両面の錬磨に励む学生諸君に大きな期待を抱くとともに、また、剣道に愛着を持つ若者を一人でも多くと念願している次第です。

最近の剣道人口は一時期にくらべ減少しておりますが、わが水産大学校剣道部にもその影響が現れてきております。毎年の部員の数はほぼ二〇人前後で大きな変化はありませんが、入部してくる新入生には、経験者が少ないときがあります。一方、女子学生の部員はここ二～三年、増加してきました。このことは、剣道が女子にも広く普及している証であり、大変喜ばしいことですが、反面、本校では相対的に男子学生の部員が減少していることにもなります。今は、剣道の振興と学生剣道人口の増加を促す手だてを、真剣に考える時期ではないかと思います。私自身も、日本古来の伝統である剣道文化をさらに発展させ、海外にも広く普及させることに、微力ながら協力したいと思っております。

いつまでも若々しく

聖カタリナ女子大学
聖カタリナ女子短期大学剣道部監督
桑原琢一

中四国学生剣道連盟四〇周年おめでとうございます。一口に四〇年といっても関係された諸先生方のご苦労はいかばかりか計り知れません。多くの先達のご苦労に感謝しながら、これからも学生諸君のためにご活躍されることを心よりお祈りします。

平成六年九月、聖カタリナ女子大学の監督を引き受けてから二か月余り、楽しく過ごした日々を回顧しながら、学生諸君へ剣道の素晴らしさについて語ってみます。

＊そもそも剣道は女性に適合したスポーツです。骨粗鬆症（若い女性にも多い）という厄介な骨の病気予防に最適です。（いつまでも若々しく）

＊全身運動であり、稽古を続けると姿勢がよく引き締まった体になり活発に動けるようになります。（雑踏の中でも颯爽と歩ける）

＊剣道は攻めながら常に身を守っており、一瞬の判断で身をかわすことの連続です。事故に遭遇した場合、瞬時に危険を避ける確立が高くなります。（危険予知能力が高まる）

＊剣道は格闘技であり、闘争心が適当に発散されるため、一旦道場をでると柔らかな優しさ溢れる表情になります。（大和なでしこの凛とした美しさ）

＊極度に神経を張り詰め、一瞬の間をおかず即座に反応するため、末梢神経から、中枢神経、大脳まで鍛えられます。（頭脳明晰になる）

＊幼児から始められます。母親のもとで幼い時から剣道の雰囲気の中でそだてたいものです。（良い意味でのママゴン誕生）

＊稽古相手が変わる度に、恐れ、惑い、疑い、決断（打突の好機に）と違った人生を味わえます。

男子学生諸君、このように剣道で磨きあげた女性を想像してみたまえ、『理知的で、優しく、背筋をピンと伸ばして颯爽と歩いている素敵な女性』が見えてきませんか？（異性・同性を問わず慕われる人）

君たちの身近にいる剣道をしている女子学生を改めて見直してみたらいかが？

＊指導者として

私は常に『運動量はすごいけれども楽しい、迷いの中から大空に優雅に舞い上がるように体が動いてしまう』と君達に感じてもらえるようにと心に念じながら元に立って竹刀を合わせています。

老若男女だれでも取り組める剣道だからといって

指導法も皆同じでは困る、体育学部系の学生とお母さん剣士とでは相手を務める我々がそれぞれの個性に合わせて、指導しております。（実力の違いに対して公平な指導法）

＊おわりに

大学生の剣道は『王者の剣』でありたい。社会に出たら指導者になる人の集まりだから、王道を進むことは、人生熱く生きる事につながります。正しい剣で人間を練り、これから出会うであろう様々な人にそれぞれ違った応対（優しく、あるいは凛として）ができるように、剣道を通じて学んだ多くのことを生涯の財産にして素晴らしい人生を歩んでください。

自主性・創造性・目的志向性

東亜大学剣道部監督
上寺康司

私は、関西学院大学で初心者として剣道部に入部しました。大学一年の一一月に入部し、何とか一年間で初段を取得しましたが、三年生の前期に、他の活動との両立が困難なことから、また初心者として継続していくことのつらさから、中途で退部してしまいました。（最後まで続けなかったことを今でも後悔しておりますが。）

従って、自分自身、四年間、大学の剣道部で稽古に精進した経験はありません。剣道は、自らその魅力を認識した二五歳から再開しました。それ以後、剣道を細々としてではありますが継続し、平成五年に東亜大学に教職課程担当の教員として赴任した際に、偶然にも剣道部の部長・監督を引き受けることになりました。その結果、学生剣道に指導者の立場で参加させていただくことになりました。

先にも述べましたように、大学での剣道がどういうものであるのかについて十分にわかっていない私は、現在、監督という立場ではありますが、学生とともに、基本稽古から参加し、学生と同じだけ汗を流すことにより、大学の剣道を体感することに心掛けています。勿論、近い将来には六段をめざしておりますので、それなりの心構えで稽古に臨んでいるつもりではありますが。少なくとも四年間は、学生と同じ稽古量をこなし、自らの体験に基づき、自分なりに大学剣道の在り方を見いだしたいと思っております。

まだ学生とともに汗を流して二年しか経っておりませんので、自分自身が学生剣道に期待することを述べるには、まだ早い気はしますが、今の段階で自分自身の抱いている学生剣道の在り方、といいますか、大学の剣道部で剣道を修行する学生のみなさんに望む三つの資質（姿勢・態度）について述べたいと思います。至極あたり前のことなのですが、それらの三つの資質とは、すなわち①自主性②創造性③目的志向性です。

①の自主性は、稽古に自ら進んで自主的、自発的に取り組む姿勢・態度です。やはり、大学ですから、上からの押しつけではなく、自ら進んで剣の道を求めて、積極的に稽古に参加してもらいたいです。自分自身を磨くために稽古に精進する姿勢・態度が大切です。

②の創造性ですが、これは日々、自ら創意工夫、研究し、稽古に精進する姿勢・態度です。一日一日の稽古を大切にし、昨日よりも今日、今日よりも明日と、自ら向上していこうとする姿勢・態度です。

③の目的志向性は、四年間の学生時代の剣道修行を通して達成すべき目的を明確にし、その目的を達成するための具体的な手段としての段階ごとの目標（団体の試合、個人の試合での勝利）を設定し、それらの目標達成に向かって、日々の稽古に臨む姿勢・態度です。

以上にあげました三つの資質（姿勢・態度）は、当然、修行途上の私自身も身につけるべきでありますし、また監督の立場としても、絶えず念頭におきながら、学生を指導していこうと思っております。

「打ち込んだ」といえるものを

山口東京理科大学剣道部監督
岩井　正

当学は昭和六二年に開学された短期大学であり、連盟に加入させていただいたのも平成三年で、皆さん方とはお馴染みが少ないと思います。

開学当初、高校時代剣道部の選手であったという学生が五名おり、縁あって顧問を続けておりますが、初めの頃にはたまに稽古の台に立った程度で、相談相手といった所でしょうか。

平成三年の秋には何とか七名の選手が揃えられて岡山の新人戦に参加しましたが、他大学に比べて選手層の薄さを痛感したものでした。

常々、学生の部活動というものは単なる親睦に終わらず、もう少しお互いの切磋琢磨があってよいと考えているのですが、これも年齢の差かと淋しく思うこともあります。

学生時代の剣道は技術的にも精神的にも次の飛躍に向かっての基礎となるもので、常に修練を通して人間形成の道を歩み続けて欲しいものです。もちろん、本来の勉学を忘れてはいけないのですが、最低週二回の稽古はむしろ気分転換になるのではないでしょうか。

先輩後輩が共に同じ道場で汗を流し、試合を通じて他大学にも知己を作ること、そして「自分は学生時代にこれに打ち込んだ」と胸を張っていえること、これが学生諸君のこれからの人生にとって誠に有意義なことであり、部活動の本来の姿であると思います。

そして学生連盟は学生たちにこの場を提供するものであり、そのためにはできるだけ学生たちにとって経済的負担の少ない方法を考えてやっていただきたいものです。

おわりに

当学は平成七年度からはあらたに四年制大学（山口東京理科大学）として再発足することになっています。何年か経てば、新しい陣容で各種の大会にも参加させていただけることになると思います。

今まで以上のご友誼のほどをお願い申し上げます。

日本人と剣道

徳島大学剣道部監督
柏原　浩

一人の英国人が徳島にやって来たことがあります。彼は英国で剣道を習っているので、日本へ来た機会にぜひ日本の剣道場を見学したいと言って、ある剣道場へやって来ました。

彼は剣道具を着けて一時間位稽古をした後に、今度は日本剣道形を教えてくださいと言うのでした。彼の剣道の腕前は稽古の様子から三～四段位のように思えたので、剣道形はたぶんそれ以下だろうと高を括っていたところが、いざお手合わせ願うとなかなか立派な形を打ったのです。そこで詳しく話を聞いてみますと、英国で剣道をしている仲間は地稽古よりも剣道形のほうが理解し易いので、いつも練習前に半時間位剣道形を稽古しているそうです。

Ｊリーグができ、貴乃花が横綱になったとかで、日本中でプロスポーツの話題が花を咲かせている昨今ですが、剣道だけが日本の伝統を固持し続けているにもかかわらず、剣道に対する国民の関心はそう高くありません。

その要因として、剣道の持つ特殊性、つまり奥の深さゆえの難解さ、稽古の厳しさ、一人前になるまで長い年月が必要であることなどがあげられるでしょう。

しかし、先の英国人のように騎士道の精神を剣道の精神の中に見出して、道としての修業をしている姿を拝見すると、現代の日本人の心の中に何か重大なものが失われつつあるという危機感を感じるのは私一人ではないと思います。

日本は戦後未曾有の経済的発展を遂げ、国民にとってはあまり喜ばしくもない円高のせいで諸外国の羨望の的となり、その上日本人の鼻まで高く上がってしまったのでは、今後の日本に将来はないと思われます。

そういった国際環境の動向に心を動かされず、日本人の美学を追求し、精神性を高めていく修業の場となり得るのが剣道だと思います。

従って、剣道に求める将来像もそういった観点からはずれることのないよう、常に自省しながら求めて行かなければ、たとえ試合に勝ったとしても何の意味もないと思うのです。勝負は手段、方法であるべきであって、目的であってはなりません。

今、日本人が本来の日本人としての心を取り戻さなければ、いつの日かあの英国人に剣の心について教えを請いに行かなければならなくなるような気がします。

日本の将来を担う学生諸君は「自分にとって剣道とは何か、剣道に何を求めるのか」を常に自問自答しつつ鍛錬に励んでいただきたいと思います。

学徒学者の剣

徳島文理大学剣道部監督
野間義明

剣道が楽しいと感じるようになったのは、四〇歳を過ぎた頃からです。学生時代は岡山大学の剣道部で、故小橋嘉平、故近成弘両範士のご指導のもと、日本剣道形や厳しく激しい練習を通して高校時代に得られなかった本物の剣道を学ぶことができました。このことは今日、私が剣道を続けることの原動力の一つとなっています。

「若者をその行く道にふさわしく教育せよ。そうすれば、年老いても、それから離れない。(箴言22：6)」

学生時代はよく誰もいない剣道場で、一人、技の工夫をしたものです。剣禅一如などといい、禅の心を取り入れようと努力したのも懐かしく思い出されます。その後、大学院へと進学し、剣道よりも学問に没頭しました。その中で学問においても剣道においても人間の生き方そのものが重要なことに気がつきました。私が自分の心の内を正直に探ってみた時、自分のうちには剣道においても学問においても他の人よりも一歩でも上に出たいという自己中心の醜いものがあり、いくら学問や剣道の練習をしても本物をつかむことができないように感じて絶望しました。そのような状況から脱却することもできず、自分をも他人をも愛することのできないという悩みの中で、天地万物の創造者である神の存在とイエス・キリストによる十字架における身代わりの死による罪の赦しを通して愛を知ったのです。その結果、心に神から来る喜びが与えられ、学問においても剣道においても自由になりました。

昭和六三年徳島文理大学の教授となり、監督として、二〇年ぶりに学生とともに剣道をすることとなりました。文理大学の学生たちと竹刀を交えながら、また中四国の学生剣道大会を見ながら思うことは、一つには学生がまことの神に出会い、本当の自由を持ち、小、中、高校時代に学んだ剣道を基礎としながらも、よき指導者と本物の剣道に出会い、自分を愛し、相手を愛し喜んで剣道をしてもらいたいことであり、二つには佐々木隆興先生のいわれる学徒学者の剣道に励み、剣道を学んだことがそれぞれの人生の益となるようにしっかりと歩んでいただきたいことであります。佐々木先生は北辰一刀流の達人であり、京都大学医学部教授も勤められ、かつ生化学者で文化勲章を授賞され、文武両道をなしとげられた方であるが、剣道に関して次のように述べておられます。「剣には学徒学者の剣、戦陣の剣、専門剣士の剣の三つある。学徒学者の剣は心即ち不動心の修練を第一義とす。即ち敵の色に付かず、誘いに乗らず、勝敗を超越した気分で道場に立つべきである。打っても打たれても潔く常に毅然たる態度であるべきである。――中略――体力の鍛錬のみを第一義とする徒はすでに三〇歳に達すれば技は下り坂となり、逐次に年齢と共に衰えるようになる。専門の剣士にも技の修練より心の修練が結局第一義となると信ずるのである。」

「私たちにではなく、主よ、私たちにではなく、あなたの恵みとまことのために、栄光を、ただあなたの御名にのみ帰してください。(詩篇115：1)」

飛躍するための〝何か〟

徳山大学剣道部監督
榊　康守

私は昭和五一年に徳山大学に赴任いたしました。当時剣道部は存在していたようですが、それまで同好会的に活動していた数名の部員は、何故か私の着任と同時に、一度も剣を交わすことなく去っていってしまいました。学内には剣道場がないありさまで、学連にも加盟していませんでした。さっそく加盟したものの一年間は準加盟ということで試合に出られず、その年に入学した新入部員数名と共に中四国学生剣道優勝大会をマツダ体育館の観覧席から「来年からやるぞ!!」という思いで見たのを今でもハッキリと覚えております。

大学での稽古はグランドの片隅にその場所を見つけ、石ころ拾いに始まり、地下たびをはいての稽古

をしましたが、雨がパラつくと校舎の陰にかくれ、雨があがるとまた稽古を始める具合でした。その時、面の中から見た真赤な夕陽がとてもきれいであり、赴任前には想像すらつかなかったこの情景が悲しくもありました。

そんな中で「中四国では、やればやっただけ必ず目に見えてはね返る。そういう意味ではやりがいのある所ではないか！」と信じることで、不安をやる気に変換させてがんばれた気がします。

このことは裏を返せば、当時の中四国は、関東・関西の学生剣道と随分実力の差があると感じていたからだと思います。しかし、近年の西日本学生剣道大会や全日本学生剣道大会での内容をみてみると、その差は確実に詰まってきていると思います。

今「何か」と具体的には言えませんが、距離が詰まっている今こそ、中四国学生剣道連盟の中にいる学生諸君は、大きく飛躍するための〝何か〟ができそうな気がすると同時に、やらないといけない気がしてなりません。

中四国は関東・関西ほど大学数は多くなく、集中していないからいろんな事がやりにくいのではなく、学校数が少ないし、集中していないからこそやらなくてはいけないことがあるのではないかと思うのです。そのためには、一部の盛り上げだけでは「何か」を見い出し、実行していくには明らかにエネルギー不足です。大会を前提とした会議の時だけの全体の集まりでない集まりがあってもいいのではないでしょうか。

そんな集まりの中で、加盟校全体の中四国学生剣道連盟飛躍の意識をもっともっと高めて欲しいし、その意識が高まれば高まるほど、いろいろの「何か」が見つかるであろうし、実行できるものと思います。

中四国の一大学の剣道部の監督として、心より学生剣道連盟の発展を祈念いたします。

学生にとっての剣道

鳥取大学剣道部監督
湯村正仁

大学を卒業して三〇年経とうとしている今、母校の剣道部の監督として学生諸君と汗を流しています。自分の学生時代と比較しながら、今の学生生活を眺めてしまうのはやむを得ないことかもしれません。時代の流れにより人の生活も考え方も違ってくるのも、またやむを得ないことでしょう。

学生時代気付かなかったテーマは、「学生にとって剣道とは」ということです。それぞれの立場でテーマは異なり、剣道をやる価値が違っていることと思います。私にしましても当時はっきりとした認識を持って続けていたわけではありません。しかし、そのうち剣道の魅力に取り付かれ、一生止められないものとなってしまいました。今では自分の人格形成の手段として汲めども尽きることのない泉のようなものです。これは続けることによってのみ得られるものであって、学生時代のテーマが何であれ到達する心境は変わりがないものと思います。卒業後、職業との絡みで続けることが困難となる場合が多いと思いますが、可能な限り続けていただきたく思います。

最高学府たる大学の剣道部諸君は、将来、剣道指導の担い手となる運命にあります。大学剣道の在り方はこのことをみきわめたうえで日常の活動に取り組んでいただきたいと思い、指導者は皆さんそのようにご指導しておられるはずです。目標は、あくまで正しい剣道の追及であり、文化としての剣道の保存でありましょう。

学生剣道連盟はまとめ役、指導的立場として、この方向を間違いなく進めていくために種々の活動を進めておられます。いま一層のご指導をお願いいたします。

実際の部活動の上からは、試合に勝つことも一つのテーマです。勝つことにより喜びが得られ、そして大学の伝統が生まれてきます。そのため剣道が試合偏重になりがちです。試合は普段の練習の成果を試す場であり、自分の間違いあるいは弱さを指摘される場であります。負けたら、次には同じ誤りは繰り返さないために、より一層の稽古を積んで次に臨む心掛けが必要です。勝つためには手段を選ばず、では剣道はすでに姿を失っています。

正しい剣道が、そしてより一層稽古を積んだものが試合の場で勝ちとして認められると考えたく思います。そして、審判はこれを正確に見極め、正しく判定していただけるよう努力していただきたいと思います。

どの大学でも長年の間には部の栄枯盛衰は付き物です。弱いときにこそ、その部を支えた努力は高く評価されてしかるべきでしょう。

大学剣道に栄光あれ！

人によって伝えるもの

鳴門教育大学剣道部監督
木原資裕

鳴門教育大学剣道部においても、部員確保はその年以降の部活動存続への試金石とも言える重要な活動です。鳴門教育大学は一学年定員一七〇名、全学年で六八〇名の小さい単科大学です。高知大学の大塚先生の調査では、男女あわせて全高等学校の生徒人口の一・五パーセントが高体連剣道部員の実数とされています。鳴門教育大学の場合、確率的には、一七〇名の一・五パーセント、約二・五名の高校剣道経験者が入学し、四年生までで男女約一〇名の部員ということになります。これでは、全員剣道部に入部したとしても、男子七名・女子五名の団体戦のチームが組めず、その上、午後五時五〇分までの授業、実習の多さ、レポート、生活のためのアルバイト等々……剣道部の活動を妨げる要因には事欠かないのが現状です。そのような中で、剣道部員として、あえて厳しい道を選んだ学生諸君にいとおしさえ感じています。

最近の若者がスポーツに求めるものとして、面白さ・楽しさ・リッチな気分があると言われています。剣道はそれとは正反対の対照的な位置にあるように思えます。しかし、現在まで剣道が学校・社会の中で確固たる地位を与えられてきたのも、社会が求める人格形成機能のようなものを剣道が担ってきたからと言えないでしょうか。確かに、剣道人口減少の中で、鍛錬主義・禁欲的性格が批判されてきてはいますが、それによって多くの成果を得てきたことも事実であろうと思います。

価値観が多様化している若者社会の中で、学連が学生剣道のあるべきビジョンをどのように提示できるでしょうか。無理しない、がまんしない、さめていて現実的な若者の風潮の中で、それに適応できるように剣道の鍛錬主義・禁欲的性格を変えて行くべきでしょうか。それとも今の剣道が再び評価されて脚光を浴びてくる時を待つべきなのでしょうか。私個人としては、その折衷案的なところで対処していくのではないかと想像しているのですが……。

今、「監督として学連や学生諸君に望むこと」というのは、逆の視点から考えれば、「監督として学連や学生諸君に何をしてあげられるか」ということになるのではないかと思っています。かって、ある先輩が次のようなことを言っていました。「自分が剣道で受けた恩を返すつもりで、後輩たちに残していけ」と、すばらしい名言であると思っています。後輩たちには、物心両面にわたる援助が必要であることはいうまでもありません。中でも大切なことは、学生の稽古に出ていくことではないかと思います。学生とともに汗をかき、師弟同行の実践が大きな励ましになるであろうと確信しています。小さな、歴史のない部であればなおさらです。一人の師匠が一〇〇人の弟子を育て、その弟子たち一人一人が、また一〇〇人の孫弟子を育てる……そうすれば、一〇〇人、万人、一〇〇万人と剣道の大きな流れができていくでしょう。私もその流れの中の弟子の一人として、次の一〇〇人に先生・先輩から受けた恩を返していきたいと思っています。

剣道は、人によってでしか次代へ伝わりません。その剣道を伝える人になってほしい。それが鳴教大剣道部員に望むことであります。

監督雑感

比治山大学剣道部監督
馬本　勉

学生時代、監督時代を含め、私が中四国学生剣道連盟に関わるようになってからはや一〇年、今年は勤務校が短大から四年制大学へ移行し（四学年揃えば楽しみだぞ）、年齢もちょうど三〇になりました。連盟の四〇周年が自分の節目と重なり、監督としてのあり方を含め、剣道生活を振り返るいいチャンスの年だと思います。

学生を指導するようになってから随分いろいろなことを学びました。まだまだ未熟ながら、学生の頃よりも分かってきたな、と思います。もちろん今が

あるのは学生時代の「あの」稽古のお陰なのですが、ただがむしゃらにではなく、考えながら技が出せるようになりました。日頃は女子だけの部員が相手とは言え、一本も拾われないよう、男性とは違った「柔軟な剣」をうまくねじ伏せられるよう心掛けてきたことが少しはプラスになっているようです。

毎年入部してくる初心者からも多くのことを教わってます。現在、部員は一ケタですが、半数以上が初心者です。これまで竹刀を握ったこともない花の女子大生が、汚い、臭い、きつい、厳しい、苦しい……のKだらけの剣道部にわざわざ入部してくるのです。彼女たちの中には有段者もうかうかしていられないほど熱心な子が多く、一年間で初段をとってしまう子もいます。

監督の方は、というと、最近は公務の忙しさにかまけて一緒に稽古する機会も少なくなりました。学生諸君に申し訳なくて仕方ありません。彼女たちは彼女たちで、人数は少ない上、みんながみんな熱血剣士ばかりというわけではなく、「剣道は好きだけど、バイトあるしい……」といった調子で、日々の稽古を維持するのが難しくなりつつあります。この頃は、まあいいか、と気楽に見ることができますが、かつては、自分の育った大学に負けないチームを、と張り切りすぎて、部員に辛い思いをさせたこともあります。ただ熱心な子は伸ばしてやりたいし、初心者だって、試合に出て勝つ喜びを味わわせてやれたら、とも思います。それだけに、常に稽古をつけてやれないジレンマは大きいものがあるのです。

現在は厳しさをあまり求めていない分、なんとなくまとまったいい雰囲気を保っています。ただこの先、部の存続のためこのまま和気あいあいと行くのか、それとも部員は減ろうとも厳しく強いチームを目指すのか。悩みは尽きません。だからこそ、女子チームを育ててこられた先生方の体験談をお伺いできるこの「連盟という場」は貴重です。小さな剣道部で他大学と交わる機会の少ない学生にとっても、「連盟」は尊い活動の場なのです。だからもう少し、小さな剣道部に優しい（経済的負担など特に……）連盟であって欲しいなあ、と思ってしまうのです。

生涯剣道を

広島経済大学剣道部監督
松尾厚弘

中四国学生剣道連盟四〇周年おめでとうございます。四〇年と一言に言っても、色々と先生方や、学生諸君の御苦労があった事と思います。学生達の剣道に対する純粋な気持ちで連盟の運営にたずさわってこられた事の積み重ねの結果だと思います。

学生生活四年間の間に色々と経験をし、色々と得るものがあり、結果を出して卒業される学生達はまだ良いとしても、何もせず又社会勉強もあまりできなかった学生は何か物足りない感じではないでしょうか。その点剣道部に入部され、大学のために、剣道部のために、結果自分の栄光のために一生懸命がんばってきた中に、責任ある役職を仲間と共に苦労し、考えて果たしてきた事が自然と身に付いて実社会に出て非常に役立つ事であると思います。

又最高学府で学問を学び、剣道部に身をおいて、剣を通して社会生活を学び、剣道では、種々な先生や先輩、友人とも稽古をお願いし、一生涯できるスポーツ「武道」を学んでいる学生諸君は、この四年間の間に、ただスポーツ剣道だけを学ばないで、武道としての剣道観を学ぶようにしてもらいたい気持ちです。

大学へ夢と希望を持って入学され、学問も努力され、剣道も目標の成績を上げなければならないという事は、学生諸君も大変な努力と精神力が必要になってくるわけですが、部員一人一人がお互いを切磋琢磨し、また良きライバルでいるからこそ目標達成までこぎつけることができると思います。何を行なうのも同じでしょうが、その中で努力し、目標を必ず達成するのだという心構えが成長の度合いを高めるのだと思うので、そういう気持ちを常に持って、一層の努力と精進を期待し、真の剣道を身につけていただきたいものだと思います。

今日本では、労働時間短縮へと進みつつある現状ですが、趣味を持っている人々は大変喜んでいると思います。何も趣味のない人々はさて何をしたら良いのかわからなく、時間を無意味に過ごしていると思います。その点、学生諸君は一生涯できる剣道に興味を持ち、学生生活の中に取り入れて、学生生活を有意義に過ごしている今、剣道の真髄を追究しながら稽古に励んだ剣道は、生涯スポーツであるから、（卒業されたなら一切剣道はやらないという人もいるようですが）前に述べたように、休暇が多くなる社会、余暇の部分で剣道を楽しんで健康維持につとめていただきたいものだと思います。

気品ある剣道を

広島工業大学体育会剣道部監督
永田　侃

中四国学生剣道連盟四〇周年にあたり、記念誌を発刊されることを心からお祝い申し上げます。

剣道は、われわれの祖先によって創造され、日本民族の長い歴史の中にあって、日本文化の発展とともに国技として発達してきたもので、現代社会の要求に応じ、体育運動の一種目として、また格技形式のスポーツとして進歩発展し、学校はもちろん、一般社会人の間にも急速に愛好者を増し、女子や外国人の間にまで愛好者が増え、老若男女各層にわたって行なわれ、年とともに隆盛になり全国いたる所で竹刀の音のしない所はないのであります。

日本人として日本に生まれ、折角剣の道に志したからには、よく剣道の成り立ちと経過をわきまえ、祖先の遺産を正しく受けとめ、これを立派なものとして後世にのこす責任があると思うのであります。

昨今試合に勝つことばかりに精力を尽くしているように思われるが、日本武道のスポーツ化によって新しい闘技としての剣道であっても、やはり基本は武道としての剣道であると思います。試合は剣道の目的ではない。どこまでも修業の方便にすぎないのであります。

利休は「茶の湯とはただ湯をわかして茶をたてて呑むばかりなり」と茶道はただ自然のままをよしとし、たくみに走ることを排すると述べています。剣の道でも武術肝要集に「業を尽くして業を捨てるべし、業を離れざれば芸を得る者に非ず」と、業にとらわれることを排すべしとしています。茶も剣もつまりは無我であり、自然であるべしという教えでありましょう。「芸を誇らず力を頼まず」と武道の目標があるように思われます。

山岡鉄舟もその門人たちに「剣術の妙所を知らんと欲せば、元の初心に還るべし。初心は何の心もなし。只一途に相手に向かって打ち込んで行くばかりなり。是れ我身を忘れたる証拠なり。……中略。少しも疑の念をいれず、修行して見よ。必ず妙処を発明するの時節あらん」とねんごろに教えています。

春秋にとむ大学剣士諸君は剣の道への厳しい錬成を通じ自己の陶冶に努めていただきたいと思います。

剣道では「強い」ということももちろん重要なことですが「強い剣道」であるとともに「気品ある剣道」でありたいものです。気品は正しい心、澄んだ気から発するえもいわれぬ気高さです。何事によらず真剣になっているときほど気高いものはなく、無念無想の境地に入りこんだ時ほど気品のあるものはありません。結局心も形もともに正しくなければ「正しい剣道、気品ある剣道」となることはできません。気品というものは、朝に求めて夕に得られるものではありません。絶えず心を練り気を養い、心と業とが進むに従って自然に備わるべきものです。

四〇周年を節目として「日本剣道とは何か」「大学剣道とは何か」原点にかえって考え直してみることも無駄ではないと思います。

そして今日、吾々のやっている剣道は果たして名の実に副っているだろうか、技の法に叶っているであろうか、よくよく吟味してみる必要があろうかと存じます。「撃剣は熾(さかん)なるに似たるも、道術は破れたるに鹿幾(ちか)し」などと、先人をして嘆かしめないように努めようではありませんか。

今日の経済繁栄と豊かさの中で大学における剣道も時代にさきがけた在り方が必要であり、剣心を豊かにし、正しさを説き強さを求めるの心構えで修業に励むべきです。

大学で学ぶ幸せと意義を自覚し、車の両輪の如く「文武不岐」の稔りの多い大学生活であってほしいと切に願うものであります。

剣道観の形成と実践を

広島修道大学剣道部監督
長野昌敏

中四国学生剣道連盟が発足四〇周年を迎えるにあたり、これまでご指導とご支援をいただいた故大森範士をはじめ多くの関係者の方々に心より感謝申し

上げます。

私は、現在広島ガス㈱の尾道支社長として尾道市と三原市のお客さまの快適な生活と豊かで潤いのある地域社会の実現に寄与することを使命として事業運営にあたっています。このような立場から、中四国連盟や学生に対する要望、期待といったことを述べてみたいと思います。

最近、私が直接体験したことで考えさせられたことがあります。ある大学の工学部の教授から依頼がありまして、特別講義として三時間ＴＱＣ（全社的品質管理）のお話をいたしました。まず驚いたことは最初から寝ている学生がおり、講義中も後ろで男女が最後まで大声で話をしています。途中で休憩をとり、時間どおり教室にもどってみれば、五分の二ぐらいが席についていない。その後、講義中にバラバラと教室に入ってきて黙礼すらしない。そのひどさに呆れかえってしまいました。学生部長や担当の教授は、少しでも企業の現実を教え生きた学問をさせたいとの想いから企業にお願いにこられました。私も貴重な時間を割いて、お役にたてればと出かけていきました。しかし、学生の方は感謝の気持ちなどまったくなく、基本的なマナーすら身についていません。いくら企業で再教育するとはいえ、なんとかならないものかと思いました。この一五〇人ぐらいの学生の中には剣道部の部員もいたと思いますが、剣道部に所属する学生だけは感謝と奉仕の精神を持ち、礼儀正しいと評価される人物であってほしいと思います。

もうひとつは、私自身の事例です。私は学生時代全日本に四度出場し、会社に入ってからも四年間は国体等にも出場しておりました。そのうち、勝った負けたの剣道に関心がなくなり、八年間剣道を止めておりました。それが、一回だけ子供たちの指導を頼まれたことがきっかけで剣道を再開することになり、徐々に自分なりの剣道観を形成するまでになりました。

このような機会を与えてくれた大学の友人や指導している子供たち、またお世話いただいている父兄に、今では大変感謝をしています。私の場合は、たまたま機会にめぐまれて剣道を再開し、現在は雑念とか妄念とか感情的ないろいろな恐れとか、そういうものの一切ない状態、絶対的積極の境地をどうつくるかを課題にして深い関心を持って剣道ができるようになりました。これが仕事にも大きく役立っています。機会にめぐまれなければ、勝った負けたの競技剣道のままで終わっていたと思います。

以上の二つの体験から、学生時代に生涯剣道につながるしっかりした剣道観の形成と、それにもとづく実践が絶対に必要であると痛感しています。剣道観の形成に役立つシンポジウム等の開催も企画いただければと思っております。

大森先生の教えを求めて

広島大学剣道部監督
草間益良夫

広島大学剣道部では、大森玄伯先生の教えを守り実践するところに大きな目標をおいております。

大森先生には、広島大学剣道部の創成期から、剣道の技術的な御指導だけでなく、剣道部員としてのあり方や人間としてのあり方など、広きにわたって本当に暖かく「手とり、足とり」御指導していただきました。

大森先生が平成四年三月にお亡くなりになってからは、「大森先生の偉大さ」と「広島大学剣道部における大森先生の存在の大きさ」を強く再認識しております。そして、大森先生から御指導いただいたことを誇りに思うとともに、広島大学剣道部への尊い「命を懸けた御指導」に対して、「言葉では言い尽くせない『感謝』の気持ち」と「大森先生の教えを守り伝えていかなければならないという『決意』の気持ち」でいっぱいです。

大森先生の剣道に対するお考えは「拙守求真（つたなきを守って真実を求める）」であり、「自分は不器用だから人の二倍も三倍も稽古しなければならない」と仰っておられました。そして、先生は、そのお言葉通り、八〇歳になられてからも、一日に二度稽古される日が週に何日もありました。そして、そのことが当然のことであるような自然体のお姿に、偉大さとともに求道者としての厳しさを感じておりました。

しかし、我々に対しては、実践の中から優しいお言葉で「教え」を示されました。そして、その教えは、広島大学剣道部にとってたいへん大きな道標（みちしるべ）となっております。

広島大学剣道部では、剣道の稽古と人間としてのあり方を、大森先生の教えに求め、広島大学剣道部で学んだことを胸を張って言えるように、部員一丸となってがんばっていきたいと思います。

正しい道を

広島電機大学剣道部監督
上野和雄

私が監督として招聘されましたのが、昭和五九年の初夏でした。その時より今日まで、様々な学生が入部し卒業していきました。

高校時代の輝かしい成績の学生、中学までしか経験のない学生（電大では大半がこのような学生である）、あるいは、まったく経験のない初心者の学生等々、種々雑多の部員構成でした。

当時、部員は少人数ながらも、自ら稽古場所を捜し歩いたり、又、工学部なので実験等により稽古時間が思うように取れない等々、様々な障害がある中、指導者を求め、積極的に活動していました。しかし、学内に専用道場がない上に、専属の指導者がいない状態での稽古ですから、成績も良くなるわけがありません。又、毎年、入学してくる学生の中にも、高校で飽きるほど稽古したので、大学では他のサークルに籍を置き、学生生活をエンジョイしたい学生が多いのが現状なのです。

私は地元で子供達の指導を始めて二五年が経過し、現在も指導しています。その延長と考え、学生達の兄貴分として良きアドバイザーでありたいと思っていますが、年齢が離れるに従い、学生の気持ちも遠のいて行くように思われます。

学生の剣道は、成績を求めるのではなく、良き先輩、後輩を持ち、他の大学の学生諸氏との交流にあるのではないかと思っています。しかし、現状は、どの大学も成績に追われているように思えてならないのです。試合に出場するからには、良い成績で帰りたい気持ちは誰もが同じだと思います。「上位入賞し、全国大会に出場したい」皆同じ気持ちで稽古に励んでいると思います。

その中で、実力はないが普段の稽古もがんばる、試合も精一杯できた、しかし上位入賞ができない、そのような学生も多い事と思います。私は、高校を卒業し民間会社に就職したために、大学の剣道部の実態も知らず大変に失礼と思いますが、前述のような学生は、将来社会人となった時、会社の柱となり力を発揮すると共に、地域社会においても活躍できる人物と信じています。

中四国連盟には、立派な諸先生方がおられるなか、現在学生の全体数が減少しています。当然、剣道部員の人数も減少している事は事実であり、今後の課題の一つであると思います。学生は、手綱を締めれば退部したがり、緩めれば手を抜き遊び始めます。しかし、試合には勝ちたいが、やはり勝てず、自分の稽古不足を棚に上げて不服を漏らすといった悪循環です。このような動揺を抑え、正しい道を指導するのが自分の役割と思っています。

前述のように、学生剣道の本質が判らないため、失礼が多々あると思いますが、諸先生方の御尽力により、この中四国連盟がより発展する事を願っております。

学生諸君に

福山平成大学剣道部顧問
福井正康

監督松田憬宣先生が三章で書かれておられますので、この場は顧問として私見を述べさせていただきます。私は平成二年度から福山大学剣道部顧問を勤めさせていただき、平成六年度からは姉妹校の福山平成大学剣道部の面倒を見させていただいております。

私は大学院の学生時代物理学を学んでおりまして、論文もいくつか書きましたが、その中で「本気」ということについて考えたことがあります。つまり自分は何のために勉強をし、論文を書いているのかということです。

物理学は自然の原理を考える学問で、より深く自然について知りたいという気持ちが多くの秀才を産んできました。この「本気」で自然を知りたいと思う気持ちが物理学なのです。それでは自分はどうなのかと考えたとき、私は胸を張ることができませんでした。知識習得だけのための勉強、業績のための論文、私の物理学には自然を知りたいという「本気」がなかったのです。

それでは剣道を志す学生諸君はどうなのでしょうか。技量に応じて目指すところは異なってくるでし

ようが、剣道に対してこの「本気」はあるでしょうか。特に全国を目指している人、同じ稽古で効率をあげたり弱点を克服する工夫をしていますか。正規の稽古時間以外でも常に余暇など見つけて努力していますか。必要以上に剣道のことが頭から抜けていることはないですか。そして本気で日本一を目指していますか。よく考えてみてください。

地域的には関東のレベルが非常に高いようですが、これも近隣の大学同士で「本気」に日本一を目指しているからだと思います。自分の「本気」を探してみてください。

さて、最近私の学校でもスポーツ推薦入試がありまして、学科試験がないものですから、勉強に関して相当な強者が入学してきます。個人的にはさっぱりしていて好きなんですが、年末になると進級で頭を抱えます。どうも始めから勉強はできない（しない）ものと考えているらしく、一年次には講義は休む、点は取れない、で薄氷の進級を果たします。二年次からは少し反省をするみたいですが、それでも勉強時間は全く不足です。

どんな学生でも社会に出たら、出身大学の看板を背負うことになるのですから、あまりに貧弱な教養では自分が恥ずかしい思いをします。

少なくとも、多少の余裕を持って進級できるだけの努力はして欲しいものです。教員としての希望です。

②部員は過去の病気、体調などについて、遠慮なく申し出て、監督の適切な指導を受ける必要があります。

③私は一日でも早く、新入部員の性格、個性、技術、生活環境などを把握するよう努めています。さらに、学内、部内の環境や状況を早く理解してもらうため、私宅やその他の場所で、新入部員や部員と会食するなどコミュニケーションを図るため努力しています。

④松山大学剣道部は最近、女子部員の活躍が目立ちます。これは一定の枠や型にとらわれず、女子部員の特長（持久力、柔軟性、タイミングの上手な取り方など）を生かした練習方法を編み出した結果だと自負しています。

⑤学生を波に乗せるには、適度の緊張状態を保たせながら、試合当日や前日に「自信と勇気」を植え付けるよう心掛けるべきです。

⑥稽古は厳しいが、その中には思いやりと情熱が満ちていることが重要です。

以上、筆が進むまま、気が付くままに記させていただきました。

監督の任務は選手の起用、技術面の指導、健康管理、明るく健全なチームづくりはもとより、日常的な指導や結婚、就職の世話など多岐にわたります。私はそのお世話の中で、お互いが感謝と礼節を忘れず、努力と忍耐に裏付けられた人間的な交わりを求めています。

今度とも、剣道の修行によって剣道の技を磨くとともに、「文武両道」を実践することによって、将来有望な社会の一員となって活躍できるよう願ってやみません。

最後になりますが、中四国学生剣道連盟がさらに発展、飛躍するよう祈念いたします。

監督の役割六つのこと

松山大学剣道部監督
青野晃治

中四国学生剣道連盟が四〇周年を迎え、おめでとうございます。人間に例えるならば、「不惑」の歳にあたります。今後とも惑うことなく、剣の道を一筋、まっしぐらに歩み、中四国学生剣道連盟に「日本一」の大輪が咲き誇れるよう願ってやみません。

私が監督を務めている松山大学剣道部は、指導陣・現役がお互いに「信頼と和」をもって、部の運営を行なうという素晴らしい「伝統」に支えられています。これはひとえに、歴代の大学学長をはじめ、長きにわたって剣道部部長としてご尽力いただいている高沢貞三教授のご仁徳のお陰であると、恐縮しているところです。

さて、指導者として微力な私ですが、大学剣道部監督の役割、使命について常日頃考えている点を皆様にご披露させていただきたいと思います。

①入学したばかりの新入部員は大学受験に励んだ結果、稽古が不足気味です。このため、いきなり激しい運動に取り組むことは禁物。アキレス腱、腰痛、過呼吸などを防ぐためにも、ランニング、素振りなどの基礎トレーニングで体力を回復させることが肝要です。